 ©2008 筑波大学生物学類

特集：国際学会参加報告

チリの風に吹かれて　―国際学会参加報告記―

伊藤　敦（筑波大学　生命環境科学研究科博士後期課程２年）

博士課程への進学を決めたころ、なるべく早いうちに国際学会での発表を経験したいと考えていた。研究を次のステップへ進める前に、これまでの成果が国際的な舞台でどう評価されるのか確かめてみたいと思ったからだ。私の修士研究のテーマは「ワレカラ」という小型甲殻類の分子系統解析であった。甲殻類の系統分類学者は数多くいるが、ワレカラ類の専門家は少なく、分子系統の仕事は他に例が無かった。今まで誰も手を付けていない研究が、一体どのような反応で迎えられるのか。期待と不安が交錯した複雑な気持ちのまま、The Crustacean Society の Mid-year meeting への参加を申請した。

The Crustacean Society は米国を中心に活動する甲殻類の国際学会で、2007 年の学会大会は南米のチリで行われた。成田からトロントを経由し約 30 時間の長旅の末、アンデスの群峰を背後に臨むチリの首都・サンチャゴに降り立った。大会の会場があるラ・セレナという街は、サンチャゴからさらにバスで約 7 時間の場所にある。荒野に敷かれたハイウェイを延々ひた走り、一緒に乗り合わせたバックパッカーたちとラ・セレナのバスターミナルに降りたのは真夜中だった。あらかじめ連絡を取り合っていた地元の大学生が迎えに来てくれたのだが、彼の姿を見つけた途端、それまで緊張で張りつめていた神経が一気に緩んだような気がした。会期中は彼の家に寝泊まりさせてもらった。

ラ・セレナは太平洋に面した美しいリゾート地で、長い海岸線沿いにホテルがいくつもたち並び、そのうちのひとつが会場だった。会期は 4 日間で，演題数はポスター発表が 173 題、シンポジウムを含めた口頭発表が 89 題。正確な参加人数は分からないが、おそらく 300 人近い人々が世界各国から集まっていた。このうち日本から参加したのは、私と下田臨海実験センターの青木優和先生のみであった。はじめのうちは知らない人ばかりで所在ない感じだったが、セッションの合間にコーヒーブレイクがあり、また夜にはワインパーティーやカクテルパーティーが開かれていたので、そうした機会に少しずつ顔見知りを増やしていくことができた。特に今大会ではワレカラ類に近縁なヨコエビ類や等脚類の分子系統に関する演題が多く、それらの演者の方々との会話の中から有意義な情報を多数得ることができた。また、自分の研究テーマに近い仕事が現在活発に進められていることを知り、大きな刺激を受けた。

学会 3 日目には私のポスター発表があった。日本での学会発表の経験から、演者が一通りポスターの内容を解説した後に聞き手からの質問を受けるやり方に馴染んでいたので、今回も始めから終わりまで説明できるように準備していた。ところが、実際の様子は予期していたものとは違った。見に来た人はポスターの文章を目で追いながら、次々に質問を投げかけてくる。ポスターに書いてあることを改めて解説する必要などなかった。続けざまに英語で質問が飛んでくると、どうしても慌ててしまう。言葉や表現が瞬時に出てこず、まごついてばかりだった。

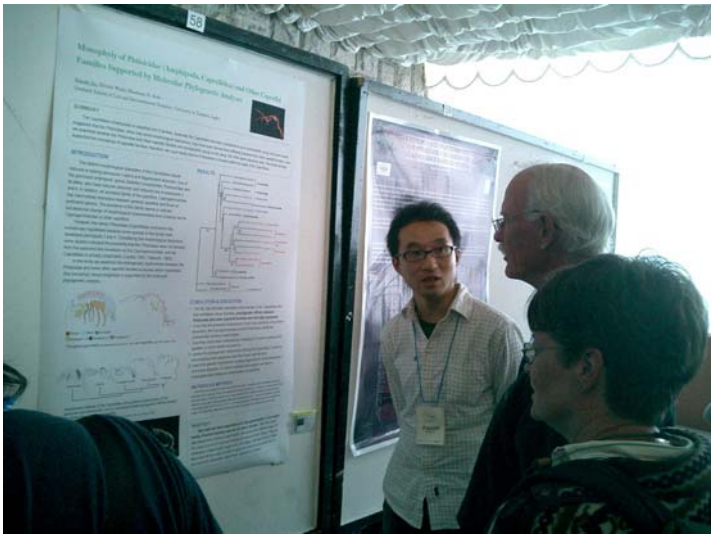
それでも多くの人が私のたどたどしい受け答えに辛抱強く耳を傾け、議論に加わってくれた。特に分子系統解析からヨコエビ類の適応放散について研究されている K. S. Macdonald III 博士からはいくつかの建設的なアドバイスに加えて「必要な仕事だから今後も頑張って続けてほしい」との旨のコメントを頂き、また著名な甲殻類分類学者である G. C. B. Poore 博士からも同様の感想を頂けたことは、この上ない励みとなった。

4 日間の大会が終了した次の日、会期中に知り合った先生や学生達と観光へ出かけた。魚市場や街並を見学した後、太平洋を臨むレストランのテラスでシーフードとチリワインを堪能した。食事を終えた頃には皆すっかり打ち解けあっていた。浜風が心地よかった。

別れ際、私は「また東京で会いましょう」と言った。2009 年の大会は東京で開催される。

今回初めて国際学会に参加し、多くの研究者と交流し、彼らの話に刺激を受け、自分の研究についても議論を深めることができた。これらの経験を今後の研究生活に反映させて、来年の東京大会も素晴らしいものにしたい。

最後に今回の学会参加を支援してくださった皆さまに感謝の意を示しつつ、この報告記を終えたいと思う。



Communicated by Hiroshi Wada, Received April 24, 2008.